

## RC-13 「歴史に学ぶ“女性と復興”～昭和三陸大津波と家族・共同体～」

課題提案者：岩手女性史を紡ぐ会、研究代表者：宮古短期大学部 教授 植田眞弘

研究メンバー：伊藤エミ子、植田朱美、柴田温子、竹村祥子、長谷川美智子、花坂清美、山口照子、星エツ子、（岩手女性史を紡ぐ会）、  
棚座久子（ウイメンズカウンセリング富山）、柳原恵（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程）

## &lt;要旨&gt;

本研究では、東日本大震災からの地域社会の復興、特に沿岸地域固有の共同体で生活している女性たちにとっての復興の課題を視野に入れながら、昭和初期の戦時体制に移行しつつある時期に発生した「昭和三陸大津波」以降の混乱期と再建期における地域の女性たちの生活がどのように変容していったのかを、専門家のアドバイスを得ながら、当時の新聞記事や町村史等の資料調査と、三陸大津波を体験された方々からの聞き取りによって纏めたものである。

## 1 研究の概要（背景・目的等）

「地域女性史」の研究は、1980～90年代に在野研究者と民間サークルが主体となって各地でスタートし、県市区町村を単位とする成果が発表されています。2010年には、全国で約900冊の刊行物が挙げられます。岩手県内では、地域女性史、ジェンダー史の総合的な成果がみられないことを機に、岩手女性史を紡ぐ会は、2005年から「岩手女性史」の基礎資料として「岩手日報」紙掲載女性関連記事による年表作成作業（1925～1934）と各種統計資料等の収集作業を継続してきました。研究を進める中、「昭和三陸地震」と「大津波」（1933.3.3）に見舞われた県民が甚大な被害を受けた記録を発見し、その一次資料の収集もしていた最中に、「2011年東日本大震災」に見舞われました。そのため80年前の震災と津波の被害は、リアルに迫ってくる史実となりました。当時の被害は、女性・家族・地域共同体をどのように襲い、また復興過程でそれはどう変容していき、女性の生活に何をもたらしたかなどが研究課題として急浮上したのです。

1930年前後、世界恐慌の波とともに、農村では度重なる大凶作を経験し、初期のデモクラシーの息吹が届いたかにみえた労働者にも、瞬間に給料遅滞・不払い・失業・就職難へと追い込まれた県民の状況がみられ、同時に、満州事変（1931）満州国建国（1932）と「戦争への扉」は、すでに開かれていたことも紙面、史料に現れています。

そんな状況下で、さらに「昭和三陸地震」と「大津波」（1933.3.3）に見舞われ、県民は甚大な被害を受けました。

その後の復興は、戦争遂行準備との関係で、大きく影響を受けているようです。

当協働研究では、当時の被害状況とその後の復興過程における漁村女性のくらしの状況を記録することが、課題の中心です。とくに被災体験だけに焦点を絞らず、家族、共同体の時代状況と変容に着目しました。

## 2 研究の内容（方法・経過等）

研究は、資料発掘調査（新聞、統計、町村史、写真集、地図、著作）と体験者への聞き取りの2つのグループで

行い、研究者、協力者からは、其々の専門性を活かした報告と助言をうけました。また、漁業の歴史と沿岸のくらしについては宮古市、山田町在住の会員の話から学び、月1回の例会を盛岡市と宮古市で開催して情報交換と共通の知見を図りました。

聞き取りは、原則的に2名が聞き手となり、女性を対象に進めました。その際、話者は1933年の津波のほか、1960年チリ津波、2011年東日本大震災も経験し、さらに戦時中の苦難を超えてきたサバイバーであることに留意して、其々のライフヒストリーにおよぶ語りを、積極的に傾聴することに努めました。話者は13名（うち夫婦2組、1933年当時居所：田老町、宮古市、山田町、大槌町）、聞き取りは、のべ19回です。80代後半から94歳までの高齢者のパワーに感動して回を重ねましたが、昨年中にご逝去されたかたもあり調査が急務であることを痛感しました。

## 3 これまで得られた研究の成果

## ①『岩手日報』にみる1933年震災前後（女性関連より抜粋）

3.1（二） ○のりを採りに行って母子2名無惨溺死  
九戸郡普代村地内の海岸で  
～のり採りの舟が転覆し、母子2名（31歳、7歳の戸主）が溺死（2.26）

3.1（二） ○女子合格者  
～女子師範昭和8年度入学合格者名掲載（二部含む）

3.1（三） ○雪女の服毒 捨てられて哀れ岩手公園で  
大原町生まれの女給  
～女給（21歳）が、水沢町蚕業試験場練習科生との恋愛解消を悲願のあげく、岩手公園で服毒自殺し危篤

3.2（二） ○一関の愛国三女性 出征部隊や遺骨の通過にはどんな深夜も必ず駅頭に歓送 駅長や町民感動

3.2（一） 広告 明治メリーミルク 母乳代用内外第一品 製造岩手県岩泉工場

3.2（三） ○赤子背負って二日の旅  
～一関山十製糸工場に工女として出稼ぎ中に、男と同棲した長女（18歳）を連れ戻すために、遠野町下宿業の女（38歳）は、盛岡迄2日かけて歩き、掛合ったが、らちがあかず、盛岡署に助けを求める

3.2 (三) ○大臣母堂の感激 国産ミシンの奨励 ～鳩山文部大臣夫人が国産ミシンを賞賛し、さらに同大臣母堂が自著冊子「五つの徳と義務精神の普及」と七宝製襟飾ピンを購入者に贈呈予定
3.2 (三) ○「家庭章」知事に推薦依頼 3月卒業の女子中等生から各校1名宛へ授与 ～大日本連合婦人会 家庭教育奨励のため、家庭章を制定し、第二種家庭章を知事の推薦に依って授与。(第一種家庭章 模範とするに足る家庭婦人対象)
3.3 (一) 広告 産婆生徒募集 高等小学卒業程度 久家産婆養成所 (仙台市)
3.3 (三) ○発会式は行わず きのうちで成立す 国防後援統制委員会協議慰問方法を決定す ～岩手県国防後援統制委員会 2日に成立協議し、各種団体 (県、岩母、愛婦、男女青年団、他) と通じて、16項目の銃後慰問方法を決定
3.3 (三) ○慰問箱を肩に8才の三少女 兵隊さんに送って下さいと 前沢全町をねる ～本年4月小学校入学予定の三少女 慰問金を集めるために、役場を訪れ、慰問箱を借り、町内各戸を訪れ歩く
3.3 (三) ○福岡婦人団 170余圓本社を経て ～福岡町善導寺内大和講福岡支部員50余名の婦人は、2.21～2.28まで、岩手号建造資金として詠歌奉唱行脚し、170余圓を岩手日報社を経て送金。銃後の慰問の範として、郡内の人々から尊敬の声が満ちる
3.4 (二) ○昨日死んだ子を背負って来る爺 (上) 下閉伊郡下恩賜巡回診療 医専 藤井敬三氏手記 ～下閉伊郡下の安家村、普代村等を約10日廻る。小学校児童は、ほとんどトラホーム。百日咳の流行。死体検案書を書いてもらう為に二里も三里も背負ってきた爺。
3.5 (三) ○襟巻までも置いて 奇特な婦人本社へ ～4日、盛岡市内の一婦人が岩手日報社を訪問し、現金12圓と衣類一包み、さらに着用していた襟巻きも寄付。 ○愛婦より二千圓 ～愛国婦人会 三陸沿岸震災地に対し、岩手支部に金二千圓を伝送

(岩手日報記事は、女性、震災、戦争問題に分類して収集)

## ② 聞き取りによる沿岸女性のくらし

昭和三陸大津波の体験者は「100年生きたら3回津波に遭う」という語り伝えを生きた方々です。「また流されるから立派な家は要らない。簡単にさっさと建てればいいんだ」と3回の津波被災と夫の戦死を超えてきた田老の女性(94歳)は、こともなげに語ります。

昭和三陸大津波の死者・行方不明者は3,064名、負傷者は1万2053名に上り、女性の犠牲者が多いことがわかりますが、この傾向は明治三陸大津波(1896)、チリ地震津波(1960)でも同様です。『津波の恐怖—三陸津波伝承録』(山下文男2005)は、「死者の性別は女の方が多かった—体力の問題と『家』の重荷—」という章立てで、女性の犠牲者が多い理由として、半封建的な家における女性の立場、主婦や母、嫁として背負わされている重荷を挙げています。

当時13歳と3歳の姉妹(田老町)は津波から3日後

に母を亡くしました。「生き延びるために他者のことを構わずでんでバラバラに逃げるべし」という「津波でんでんこ」の教えを実践することは、嫁や母として家族のケア責任を負う女性たちにとっては困難であったと思われます。

いっぽう労働においては「男は米稼ぐ、おなごはお菓子稼ぐ」と語られたように、賃労働が重要な女性の役割であり、震災後の田老防潮堤工事に女性が参入することも、当地においては震災以前から女性が「手間取り(賃労働)」として土木作業に従事することが珍しくなかったという背景があります。

当時の三陸の漁村は半農半漁の社会であり、沿岸部での海藻取り、近海でのイカ釣り、定置網漁などの漁業に加え田畑での農業も行っていました。田畑作りも女性が担っています。地域によって、女性も漁船に乗り、その他は、浜で加工を担いました。家継続のための婿取りや養子縁組は多く見られますが、漁家の労働は、夫婦単位を基本としたため日常的な親戚付き合いは少なく、農家のような共同体規制は受けにくかったことも推察されます。

リアス式特有の地形により、其々の浜の漁業形態が異なることは大きな特徴であり、研究過程での発見でした。

## 4 今後の具体的な展開

今後とくに平成25年度は、地域を宮古市、山田町、大槌町、釜石市に限定して、すでに何回か訪問した聞き取り対象者へのまとめ作業と大槌町と釜石市での新規聞き取りを企画します。

被災と復興過程における女性と家族・地域共同体の変容過程を明らかにするための調査を継続し、話者のライフヒストリーを記録し、統計資料、写真を含めて記録を刊行する予定です。

さらに、資料分析と聞き取りの結果をあわせて検討することで、2011年東日本大震災後の復興へのとりくみに対して、女性と復興への視点が提示できるよう取組みます。

## 5 おわりに

貴重な体験談を聞かせてくださいました13名の話者に紙面を借りて心から感謝申し上げ、さらに其々のライフヒストリーを記録できるよう当研究を深化させる所存です。

## 【参考資料、文献等】

「岩手日報マイクロフィルム版」岩手日報社

昭和8年3月4月

「岩手県昭和震災誌」岩手県知事官房

昭和9年1月

「大槌海嘯略史」大槌尋常高等小学校臨時海嘯調査部

昭和8年12月

「山口弥一郎選集第6巻 第一篇」世界文庫

昭和47年12月

「三陸漁村の研究」釜澤勲

昭和27年1月

「アサヒグラフ特別号大震災全記」朝日新聞出版

平成23年11月